

# 『伝える力』を育む授業の創造

～ 振り返りを生かす学習過程の工夫 ～

高杉廣張

野沢喜満子

大矢裕子

## 1 主題設定の理由

### (1) 英語教育の動向から

文部科学省は、グローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、中学校における英語教育の高度化を目標に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を策定した。中学校段階で生徒に求められるのは、「身近な話題についての理解や簡単な情報交換、表現ができる能力」である。そして、私たち教師には、その力を養うための授業改善と「英語を用いて～することができる」という形式による目標設定（CAN-DO リスト）に対応する形での4技能の評価が求められている。

このことから「英語を用いて何をするのか、何ができるようになるのか」を意識することが重要であり、単語を並べ、正確な文法で書いたり、話したりするだけでは足りないとわかる。つまり、「自分の意見を相手に伝える」「必要な情報交換をする」「相手の言葉の意図を理解する」など、伝える内容を吟味することが重要であるということだろう。

本校英語科のいう『伝える力』を育む授業とは、まさしくそのような能力の育成を目指す授業であり、英語教育の動向は本研究と大きく関わるものである。

### (2) これまでの研究との関連から

昨年度までは、研究主題を『気づき』を促す授業の工夫とし、自ら学習する生徒を育成することを目指してきた。「既習の知識を活用すれば、伝えたいことを伝えることができる」と生徒に気づかせることで、英語学習に主体的に取り組む態度を育成することができると考えた。その結果、ある程度正確な、まとまった量の英語を書くことはできるようになってきた。『気づき』が英語の正確さを高め、さまざまな表現を使ってみようという意識を高めることに効果があるだろうことは解ってきたものの、「伝える相手」や「伝える内容」などに対する生徒の意識を高めることにはつながらなかったように思われる。

本校英語科では『伝える力』を「身の丈にあった英語を用いて、自分の言いたいこと、考えや気持ち等を話したり、書いたりするなどして伝えることができる力」と定義して研究を進めてきた。平成23年度より3年間、研究主題を「『気づき』を促す授業の工夫」と変えたのだが、生徒に『伝える力』をつけさせたいという願いは変わってはいない。しかし、研究を進めていくうちに、自分の伝えたいことが伝わったという達成感や、そこまでの過程で努力をしたことへの充実感を感じられている生徒がどれくらいいるのだろうかという疑問が湧き、そのような視点から研究を見つめ直し、生徒の学習を捉えていく必要があるのではないかという思いが強くなってきた。そこで今年度より研究主題を「『伝える力』を育む授業の創造」とし、「伝えたいという思いをもつことができるのか」「伝えたいことが伝えられているのか」という、生徒が自分自身の学習を振り返ることを重視して研究を進めていこうと思う。

### (3) 生徒の実態から

本校生徒は語や表現などの知識を豊富にもっており、まとまった文章を書くことができる。昨年度までの研究はライティング活動を中心に据えてきた。5W1Hの視点から文章をより具体的にすることや、文と文のつながりを意識することなど、文章構成について学び、書くことのできる文章量も増えてきたように感じる。書くことが習慣化し、抵抗を感じる生徒も減ってきたようにも思う。しかし、そう感じるのと同時に「これだけ知識が豊富であれば、もっとより良い文章を書けるのではないか」と、長い文章を書いているにも関わらず、どこかもの足りなさを感じることも増えてきた。「相手に伝える」という生徒の意識が薄れてきているように感じるのである。例えば、文中に難しい単語や表現を使用していることが挙げられる。相手が自分の書いた文章を理解できるのかどうかを吟味せずに、辞書で調べた単語などをそのまま使おうとすることがある。書いたものをいざ発表という段階になって、何と読むのかと読み方を尋ねてきたり、教師が書いてある文の意味を問うと「よく分からない」という答えが返ってきたりするるのである。つまり、生徒は自分の手に負えない

単語を使っているのである。作っている本人がよくわからない文章を、相手は理解できないであろうし、伝えたいことを伝えることはできないであろう。

以上のことから、まず「伝えたい」という思いをもつこと、そして、その「伝えたい」という思いを原動力として「伝えようとしたことが伝わったのか」を自分自身で振り返り、さらに改善していくことのできる力を育む必要があると考える。

## 2 研究の目的

本研究の目的は、生徒に『伝える力』をつけさせるために効果的な授業のあり方や指導法を探ることにある。英語を用いて相手に何かを伝える際に、正確さや量などが重要であることは言うまでもないが、そればかりに意識が向き、「伝える内容」や「伝えられたのか」を考えることがおろそかになってはならない。英語に対する興味・関心を高め、有用感を与えるためには、やりとりをして「言いたいことが伝わった」という達成感や充足感を生徒にもたせることが求められるであろうし、英語を用いて伝える必然性や必要性を生徒に感じさせる必要があるだろう。そのためにも、生徒が自分の学習を振り返る視点を取り入れた授業づくりを目指して研究を進めていきたい。

## 3 全体研究との関わり

本校英語科では、全体研究でいう「『深く考える』授業の創造」に、(1)自分の学習を振り返る、(2)既習知識を吟味し、さらに効果的な表現方法や文の形を模索するという2点から迫っていかうと思う。

### (1) 自分の学習を振り返ること

これまでの授業では、文章を作る過程において、その構成や表現、内容を練ることに焦点を当ててきた。しかし、最終的に思いがどのように表現されたのか、また、伝えなかったことが伝わったのかという視点をもつことが生徒自身にあまりできていなかったように思う。そこで今年度は、自分自身が表現したものを振り返る場の設定を重視したい。自分の伝えたいことが伝わるものなのかどうか、また、自分の手に負える範疇を超えていないかを自己の行為の全体像を把握しながら見極めることも重要になってくる。知っている語や表現を並べて、形を整えればよいのではなく、自分の伝えたいことが伝わるように、そして、言葉に思いを乗せられるようにしていくことを大切にさせたい。そのためには、最後まで「これで本当に良いのか」「これで十分なのか」と自分自身に問いかける力である批判的思考力や、そのようにして学習を進めてきた自分の学習方法は有効であったのかを振り返るメタ認知能力を高めていく必要がある。

そのために英語科では次のことを意識していきたい。まず、自分の書いたものを出来る限り反省し、改善、推敲する場面を作ることである。次に、仲間との交流場面、具体的には他者のものを評価したり、その他者のコメントの有効性を判断したり、応用したりする場面を設けることである。自分自身で自分の書いたことや発話したことを振り返ることは重要であるが、それだけでは自己の状況を改善するのは困難である。将来、生徒が第三者の視点から自分自身の学習を振り返ることができるように、まずは仲間から指摘してもらって経験を積ませたい。特に英語がわかりやすかったかどうかを指摘してもらうことは重要な経験になると考える。これは、時間をかけて育てていくものなので、日々の授業からじっくりと取り組みたい。

### (2) 既習知識を吟味し、さらに効果的な表現方法や文の形を模索すること

(1)とも大きく関わるが、自分自身の学習を振り返って終わるのではなく、振り返りから得られたことをもとに、自分の使っている表現や表現方法をさらに手直ししたり、推敲したりする際に、より良い表現や文法形式が自分の習った知識の中にあるかどうかをさらに探すことは意味のあることであろう。既習知識のある作業をする際に総動員させることで、既習知識の定着を促し、さらに既習知識の有効性も意識することになるはずである。

全体研究で言う「深く考える」を英語科では、学習内容を生徒個人がそれぞれの文脈の中で活用することで真に理解することができるようにすることだと考える。そのためには表面的な理解では

ならない。知識を活用させるバリエーションを生徒に様々に提供し、知識を実際に試行錯誤の中で活用できる段階にまで引き上げ、最終的に学習した内容をどう使おうかという視点を彼らの中に実感としてもたせることができるように、日々の授業づくりにあたりたいと思っている。

#### 4 研究経過

##### H17～19 研究主題 『伝える力』を高める授業の工夫 ～教科書を発展的・創造的に用いた活動を通して～

本主題で研究をスタートさせてから最初の3年間は、『伝える力』を生徒の実態に合わせて6つに分類し、それぞれの『伝える力』を高めることを目的に研究を行った。その分類とは、以下の通りである。

◇『伝える力』の分類

- ①聞き手に十分に伝わる声の大きさを音読したり、英語を話したりすることができる力
- ②スピードや抑揚、間などを大切にして音読したり、話したりすることができる力
- ③伝えたい内容に見合った身振り・手振りや、実例・実物などの提示を交えて、聞き手を意識し効果的な発表をすることができる力
- ④教科書の基本文や本文で使われている表現などをモデルとして、既習の学習事項や語句・語彙をできる限り用いて伝えたい内容を話したり書いたりすることができる力
- ⑤知っている語句や優しい表現を用いて説明したり、言い換えたりすることによって、聞き手や読み手の理解を助けることができる力
- ⑥文の配列や順序性を吟味して、伝えたい内容を話したり、書いたりすることができる力

##### H20～22 研究主題 『伝える力』を高める授業の工夫 ～伝えることへのレディネスづくりを意識して～

H20～22年度までの3年間は、それまで行ってきた授業を生徒の『気づき』という視点から捉え直し、効果的な授業のあり方や指導法を探った。『伝える力』をより豊かなものにするために、伝える表現を考える前のレディネスづくりに取り組んだ。また、『伝える力』の基礎・基本となるよう、帯プログラム活動も整備した。

##### H23～25 研究主題 『気づき』を促す授業の工夫

『伝える力』を伸ばすために、生徒の『気づき』という視点で学習活動や課題のあり方、教師の役割などを捉え直した。生徒が自分の伝えたいことを表現するためには、伝達に対する課題や目標に対し「問い」をもつことや課題達成のために「既習事項を活用する力」が必要となる。また、自ら学習する生徒を育成するためには、「問い」と『気づき』の繰り返しが重要であると感じた。

#### 5 研究仮説

「伝えたい内容が伝わったのか」を振り返ることで、自分自身の表現について吟味していく姿勢が養われ、『伝える力』を育むことができるであろう。

#### 6 今年度の研究内容

自分自身の学習を振り返るための学習過程の工夫によって、生徒に『伝える力』を育むことはできるのか、また、『伝える力』にどのような効果を与えるのかを検証する。

## 7 今年度の実践例

### ・実践1 事前研究会より

第2学年 英語科学習指導案

授業者 野沢 喜満子

#### 1. 単元名

“Homestay in the United States”

(NEW HORIZON English Course 2 - Unit 4)

#### 2. 単元について

中学の英語学習を始めて1年が過ぎ、語彙も少しずつ増えてきた。今年度に入り、be動詞の過去形や、過去進行形、未来表現 (be going to)、不定詞 (副詞的、名詞的、形容詞的用法)などを学習し、表現の幅がより広がってきている。

Unit 4では、「ホームステイ」が話題として取り上げられている。Starting Outでは、ホームステイのガイドブックの中で「have to」「don't have to」が、Dialogでは、滞在先のホストマザーとさくらの会話の中で「will」が、Reading for communicationでは、生徒と教員の間の、ホームステイに関する相談や助言を通して、「must」「must not」が導入されている。

アメリカでのホームステイについて学習することにより、国にはその国独自の文化や習慣があることを知り、改めて、日本の文化・習慣について、あるいはその違いについて考えたり、異文化交流の際などに留意する点についても知ることも出来、世界の様々な側面について考えるきっかけにもなる単元である。

助動詞に関しては、1年次に「can」を学習している。本単元では、実際のコミュニケーションでも使用頻度の高い、「have to」「don't have to」「will」「must」を学習し、より幅の広い表現ができる様になると考えている。

#### 3. 単元の指導目標

- 「have to」「don't have to」や「will」「must」を用いた文の、形、意味、用法を理解することができる。
- 「have to」「don't have to」や「will」「must」を用いた文の、形、意味、用法を理解し、口頭や文字で表現することができる。
- ホームステイについての英文を読み、海外での生活に関心をよせ、同時に日本の文化や習慣にも目を向け、違いについて考えることができる。

#### 4. 本時の授業

(1) 日時 平成26年 7月4日 (金) 14:10~15:00

(2) 場所 山梨大学教育人間科学部附属学校 2年2組教室

(3) 本時の目標

- 「have to」「don't have to」を用いた文の形・意味・用法を理解し、表現できる。
- 活動を通し、自分の考えや仲間の考えを生かしながら、クイズを校正することができる。

(4) 展開

Procedure & Time	Teacher's Activity & Help	Student's Activity	Remarks
Greeting Warm up (3)	・英語で挨拶を交わす。 ・簡単なQ&Aで英語の授業の雰囲気づくりをする。	・英語で挨拶をする。 ・Q&Aに答え、授業を始める心構えをつくる。	顔を上げて大きな声で行う。
Basic Skill Training (9)	・復習させる。 ビンゴで単語の復習 P Cを使って文法の復習	・復習する。 ビンゴで単語の復習 P Cを使って文法の復習	Activity Iで使える表現となる。

<p>Activity (35)</p>	<p>○3 (4) Hints Quiz をつくろう！！ ～職業・キャラクターVersion～ ①活動について説明する。</p> <p>(Quiz;前時までの活動)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ(4人)毎に、職業・キャラクターのうち1つを選ぶ</li> <li>・選んだその職業・キャラクターについて、しなければならない行動(動作)を英語で表現する。</li> <li>・4人、それぞれがつくった文を持ち寄り、その中から3つを選び3 (4) Hints Quiz とする。</li> </ul> </div> <p>②ワークシート (A) を配付する。</p> <p>③皆の前でグループ毎に発表し、何の職業(キャラクター)かあてさせる。 発表者以外の班(聞き手)に、職業をあてさせる。</p> <p>④ワークシート (B) を配付する。</p> <p>⑤他班の発表を聞き、良かった点改善点を考え、書かせる。</p> <p>⑥考えたことを生かし、再度クイズ作りをさせる。</p>	<p>①本日の活動について理解する。クイズを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発表するときの役割の確認</li> <li>・発表する文の順序の確認</li> <li>・発表する文の練習等</li> </ul> <p>②ワークシート(A)に取り組む。</p> <p>③皆の前でグループ毎に発表し、何の職業(キャラクター)かあてする。 発表者以外の班(聞き手)は、発表を聞き、あてる。</p> <p>④ワークシート(B)に取り組む。</p> <p>⑤他班の発表を聞き、良かった点、改善点を考え、書く。</p> <p>⑥考えたことを生かし、再度クイズ作りをする。</p>	<p>この後の活動の方法を提示することになる。</p> <p>ワークシート (A)ークイズに答えよう (B)ー友達の手つたクイズについて考えよう</p> <p>☆よりよい出題・発表について考える。 ・クイズをもとに深く考える。</p>
<p>Consolidation &amp; Greeting (3)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業を通して考えたこと、感じたこと、思ったことをワークシートにまとめさせる。</li> <li>・活動の様子を振り返り、成果と課題をフィードバックする。</li> <li>・英語であいさつをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業を通して気づいたことをワークシートにまとめる。</li> <li>・教師のフィードバックを聞き、各自の活動を振り返らせる。</li> <li>・英語であいさつをする。</li> </ul>	<p>本時の気づきが次時に活かされるような、投げかけを心がける。</p>

## ・実践2 中等教育研究会より

### 第1学年 英語科学習指導案

授業者 大矢裕子

#### 1. 単元名

Unit 6 ベッキーのおばあちゃん (*NEW HORIZON* English Course 1)

#### 2. 単元について

これまでに、生徒は **be** 動詞・一般動詞の使い方、**what** を用いた疑問文、複数形と数の尋ね方等を学習した。語彙に関しては、教科書の内容に沿って必要な語句を学習するにとどまっているため、幅広い表現ができるほどの習得には至っていない。したがって、表現活動といっても、1年生の現段階ではかなりコントロールされた限られた範囲のものにならざるを得ない。それでも、5月には **be** 動詞を使って自分の名前や出身地しか表現できなかったものが、夏休み前に行った自己紹介活動では、一般動詞を学習したことにより、自分の好きなことやすることについても伝えられようになり、少しずつであるが、表現の幅が広がってきた。さらには、学習した言語材料や表現方法を適切に用いて、伝えたいことを一つ一つ英文にしていっていただけにとどまらず、自己紹介文全体を一つの文章のまとまりととらえ、前後の文同士のつながりや一連の流れについても考えながら表現することが、聞き手にとってわかりやすいものになることを学習した。本単元では、自分以外の人物について紹介しており、まさに教科書で学習したことを「生きた場」に持ち出して活用するのに格好の題材である。

さて、本単元は、ベッキーが祖母の写真を見せながら紹介する場面、ベッキーの祖母ナンシーを話題としたブラウン先生とベッキーの会話の場面、その会話の続きでベッキーがナンシーについて語る場面の3つの構成になっている。これらの場面展開の中で三人称単数現在形が肯定文・疑問文・否定文の3つのタイプの文でどう現れるのかを学習する。三人称のとらえ方や動詞につく **-s**、**-es** は、中学生が躓きやすい学習事項である。そこで、三人称を把握しやすくする手だてや場面設定を工夫した学習活動を展開する必要がある。

今回、「山梨のゆるキャラ」を考え、それについて紹介することで、これまで自己紹介活動などで学習してきたことを、どのように応用して使えるかを生徒は考えなければならない。また、文章についてわかりやすく興味を持って聞いてもらえるように、内容や順番なども工夫しなければならない。また、発表や伝える場を与えられることで、さらに『伝える力』を育むことにつながるであろう。

#### 3. 単元の指導目標

- 身のまわりの人や物について説明する文を書く。
- 相手が説明する人や物について聞いたり読んだりして理解する。
- 仲間との交流会を生かし、伝えることを意識して自分の紹介文を校正する。
- 三人称単数現在形（肯定文・疑問文・否定文）の形・意味・用法を理解する。

#### 4. 本時の授業

(1) 日時 平成26年10月18日(土) (11:10~12:00)

(2) 場所 山梨大学教育人間科学部附属中学校 1年2組教室

##### (3) 本時の目標

- 仲間との交流会や自分自身でのふり返りを生かし、自分の紹介文をどう修正するかについて考えることができる。
- 紹介文を修正するために、文をより良くするための視点に気づこうとしている。

(4) 展開

procedure (Time)	Teacher's Activity & Help	Student's Activity	Remarks
Greeting (2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>英語であいさつをする。</li> <li>英語で日常事象を質問する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>英語であいさつを交わす。</li> <li>英語で日にち、曜日、天気等の会話をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>元気に反応しているか</li> </ul>
Basic Skill Training (8)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○紹介文に使う単語の確認をする</li> <li>・動詞の音読練習をさせる。</li> <li>・三人称単数現在形の注意事項の確認をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○紹介文に使う単語の確認をする。</li> <li>・動詞の音読練習をする。</li> <li>・三人称単数現在形の注意事項の確認をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆既習の英語で、様々な紹介ができることに気づくような言葉がけをする</li> </ul>
Activity I (25)	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆紹介文の交流会〈グループ〉</li> <li>○修正するための視点に気づかせる。</li> <li>・ゆるキャラを作った目的をもう一度確認し、そのためにはどのような文である必要があるかを考えさせる。</li> <li>・相手にわかりやすく伝えるためにはどんなことに気をつけたらよいかを考えさせる。</li> <li>(発表→全体で共有)</li> <li>○視点を基にしてグループごとに仲間の紹介文を読ませ、交流(検討)させる。</li> <li>・わかりやすい文であるか?</li> <li>・山梨と関係しているものになっているか?</li> <li>・ゆるキャラの絵と英文の内容が合っているか?</li> <li>・興味を持ってもらえるような工夫が感じられるか?</li> <li>(ワークシートの活用)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆紹介文の交流会〈グループ〉</li> <li>○修正するための視点に気づく。</li> <li>・ゆるキャラを作った目的をもう一度確認し、そのためにはどのような文である必要があるかを考える。</li> <li>・相手にわかりやすく伝えるためにはどんなことに気をつけたらよいかを考える。</li> <li>(発表→全体で共有)</li> <li>○視点を基にしてグループごとに仲間の紹介文を読み、交流(検討)する。</li> <li>・わかりやすい文であるか?</li> <li>・山梨と関係しているものになっているか?</li> <li>・ゆるキャラの絵と英文の内容が合っているか?</li> <li>・興味を持ってもらえるような工夫が感じられるか?</li> <li>(ワークシートの活用)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆振り返りを次に生かすことと、生かす際に工夫した点や、仲間の発表から学んだことなども記録させる。</li> </ul>
Activity II (10)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分の紹介文の見直しをさせる</li> <li>・グループの仲間からの意見を参考にさせ自分自身で再度振り返らせる。</li> <li>・どのように修正するのかを考えさせワークシートに記入させる(理由や工夫点も記録しておく)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分の紹介文を見直す。</li> <li>・グループの仲間からの意見を参考に自分自身で再度振り返ってみる。</li> <li>・どのように修正するか考え、ワークシートに記入する。(理由や工夫点も記録しておく)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆自分の紹介文と、取り組み過程を俯瞰させる。</li> </ul>

Consolidation (5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動の様子をふり返り，成果と課題をフィードバックする。</li> <li>・次回の授業について伝える。</li> <li>・英語であいさつをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師のフィードバックを聞き，各自学習のまとめをする。</li> <li>・次回の授業についてつかむ。</li> <li>・英語であいさつを交わす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の学習が，次時に生かされるような投げかけを心がける。</li> </ul>
----------------------	--	--	---

## 8 研究のまとめ

「『伝える力』を育む授業の創造～振り返りを生かす学習過程の工夫～」というテーマで，今年1年，より良い授業を模索してきた。このテーマについては，我々英語科の過去からの課題の継承と今年度の全体研究主題の「『深く考える』授業の創造」との関係という2つのサブテーマが内在している。前者については，自分の身の丈にあった英語力を用いて，自分の伝えたいこと（気持ちや意図）を話す・書くによって達成できる『伝える力』のさらなる伸長を目指し，この力が自分の中に内在化したことを実感することを生徒に感じさせるにはどうしたらよいかということである。また，後者については，「『深く考える』授業の創造」のために，授業の中で自分の状況を『俯瞰する』場面を仕組み，英文吟味の中で試行錯誤をさせてより深い思考を生み出すためにはどのような方法が有効かを模索することである。この2つのサブテーマを研究するために取り組んだ指導方法として，1つは，自分の文章の「伝える内容」や「伝えたい内容」が伝えられたのかどうかを他者からの情報や批評によって確認する作業を課すことであった。もう1つは，他者（教師や仲間）から得た文章に関する改善示唆の情報を活用して自己の文章を推敲，完成させることであった。そして最後に，自己の文章の改善，あるいは文章を伝える内容に近づけるのに資する情報や知識が身近のどこにあるかを確認させることであった。以上の指導によって，他からの情報活用の意義，活用できる知識の確認，書かれた内容が伝わった成就感を生徒に与え，結果的に文章作成において，様々な情報を元に試行錯誤を行って深く考えることが意味あることであることを実感させることが最終的な研究目標であり，このことは全体研究主題の「『深く考える』授業の創造」に自ずと繋がるものだと考えた。

以上の研究テーマについて，7月の事前研究会においては，他者との交流の生かし方について模索しながら授業を進めた。また，10月の公開研究会においては，三人称単数現在の文法項目の習熟とその中の「山梨のゆるキャラ」の紹介文を書くという課題を単元構成として10回に及ぶ授業を実施した。そして実際の公開授業では，内容が伝わりやすい文章のための①文章を修正する視点の検討，②書かれた英文のピアフィードバック（生徒相互の点検），③フィードバックによって得られた情報を用いての推敲作業，④活動の成果と課題の自己チェックの4つを行わせた。こうした作業の中で深い思考に関わらせ，また，『伝える力』の伸びを実感したケースもかなりあった。実際に，仲間の英文に関して様々な観点を探す中で，結果的には英文を良くする，あるいはより良く内容を伝えるための自己の基準を作ることに成功した生徒もいたし，その基準について既存のものにあらたな視点や基準を付け加える者もいた。中にはなかなか英文が良い方向に改善されない者もいたが，そういう生徒は英語のさらなる基礎知識の習熟に励まなければならないことを実感することになった。最終的に完成した生徒の「ゆるキャラの紹介文」は上級生の評価や小学生への説明と紹介文の評価コメントという事後指導が行われた。そのような活動の中で，さらに，文を伝えることの重要性，あるいは，うまく伝えるためには，文の内容だけでなく表情や音声による表現方法も重要であることを生徒は直に感じるようになった。その意味で，今回の研究は一定の成果を挙げることができたと現在考えている。つまり，本研究で計画された様々な作業の中で，相手を意識して伝えるために試行錯誤することで深く考えることになり，その学習過程を振り返ってみる，別の言葉で言えば，『自分自身を俯瞰する』ことでより良い文，より良く伝える方法を探ることができた。

さて，以上が，今年度取り組んできた事前研究会，公開研究会や授業の主な反省であるが，以下では，特に公開研究会を行った1年生に関して英語指導全体の総括を述べる。1つは各技能に関する到達状況を（1）生徒観として，研究テーマの深化のために指導上，日頃心がけてきたことを（2）指導観として，最後に，全体研究との関わりを文字通り（3）全体研究との関わりとして述べることにする。



### (1) 生徒観として

まず「読むこと（音読）」に関しては、大きな声でしっかりと読める生徒がほとんどである。特に、全体で行う場合は自信のある生徒を中心として一生懸命音読練習に取り組み、単語の読み方や発音を教え合う姿も見られる。同時に、不安な気持ちの生徒も周りの生徒の支援や協調的な雰囲気を支えられ頑張ることができるが、個として全体への発表となると自信や遂行力に差を感じる。

「聞くこと」に関しては、クラスルームイングリッシュをできるだけ用いることにより授業中の簡単な指示などは理解できるようになってきた。しかし、英語特有の音や、音と音とのつながり、音の消失、強弱、抑揚は、それらに慣れていないこともあり、聞き間違いや聞き取れないこともよくある。限られた時間の中で、英語の音にできるだけ触れさせる時間の確保が必要だと感じる。

「書くこと」に関しては、基礎基本の事項は、少しずつ身につけてはいるものの、この定着にも大きな差がある。新しい文法や表現方法を学習したあとは、できるだけそれらを使って自分のことを書く活動に取り組んできた。その際、たくさん書こうとしたり他とは違うものを書こうとしたり、意欲的な生徒もいる反面、自分の書きたいことを既習の単語や表現を使って英文にすることができない生徒もいる。「書きたいことが書ける」、「伝えたいことが伝えられる」という生徒の思いを生かした学習活動が必要であろう。

「話すこと」に関しても、「読むこと」「聞くこと」「書くこと」と同じような課題が見られる。正確さにとらわれたり、人前で間違えることを恐れたりして、自信を持って堂々とした発表ができない傾向がある。そのため、発表の場を与え、慣れさせることも必要であろう。また、発表は伝えるための絶好の機会であり、同時に伝えるために「深く考える」ことにもなると思う。

### (2) 指導観として

私が、(1)に記した生徒の実態や課題をふまえながら、「『伝える力』を育む授業の創造」ができるよう、指導する上で日頃より心がけてきたことやポイントは、以下の2点である。

#### ①知識を活用させるための工夫

語彙や文法事項などについての知識は豊富であり、それらに関する発問には瞬時に反応し、積極的に発言する生徒が多い。しかし、その知識を“コミュニケーションのための道具”という言語としての本質的な働きを生徒に実感させることはできない。そこで、学習した語彙や文法事項などを活用する表現の場、表現のチャンスを計画的に取り入れてきた。それによって、活用する知識を吟味し選択する際、自然と試行錯誤が行われ、生徒は深く考える授業へと導かれた。

そのためにまずは、知識活用への動機の活性化が重要となった。そこで、課題や問題を前にしたときに、「取り組んでみたい」という気持ちをわき上がらせるような場面や問題を解決するための知識活用の必然性や表現して伝える必要性を意図的に設定した。そして、表現のチャンスがあることにより、効果的に自己の意図を伝えるために自然と生徒各自が表現に必要な様々な事項（表現の選択や文法の正確さ、内容的な工夫）について考えることになった。また、課題や問題が複雑で、検討する項目が多くなれば、それだけその考える行為も深いものになると考える。聞いたり読んだりして得た知識やモデルの中に自分を置き、自身の経験、考え、思いなどを加えて、再び書いたり話したりする活動を仕組むことで、表現に至るまでの過程でどの知識が有効かを考え、また、表現されたものを聞いたり読んだりすることで、さらに自分の表現を客観化することになったり、習得した知識の別の活用方法を考えることになったと感じている。この行為は、同時に『自分自身を俯瞰する』こととなった。

#### ②ステップを踏んだ学習の振り返りの提供

学習を自分自身で振り返り、どんな思考の過程をたどったのか、自分自身の作品にどんな変化（成長）があったのか、どうしたらさらに伸ばせるか、自分自身のその先の方向性を見つめるため、いくつかのステップや段階を追いながら振り返りをさせた。その手だてとして、自己の表現や知識活用の状況を他の生徒の状況と比較・分析させたり、教師が適宜その方法を示したりしながら、自己の反省・改善を通して行わせてきた。

### (3) 全体研究との関わりとして

言葉を実際に活用するためには学習者の中で様々な試行錯誤が行われる。この試行錯誤が『深く考える』ことにつながっていく。「書くこと」においては、①表現や語彙の選択、②英文へのコメ

ントにおける活用の選択，③表現の正しさのチェック，④英語の書き直しにおける情報の取捨選択，⑤自己の英文の正しさの判断等の場面で「深く考える」ことになるであろう。また，様々な文章作成段階で「深く考える」ことで，①知識の定着がより確かなものになる，②より良い英語の表現につながる，③英語上達のための方策や情報に目が向くようになる，④英語への学習や取り組みにおいて，自己の状況を点検するようになるであろうと思う。全体研究の主題のキーコンセプトとして、『自分自身を俯瞰する』というのがあるが，「深く考える」行為の意義との関係では，この『俯瞰する』とは，英語の取り組みにおける自己の状況の把握ということで④になるであろう。

今回の「ゆるキャラ」の紹介文づくりにおいては，「深く考える」授業の要素が多く含まれていた。それらは例えば，①目標に合ったゆるキャラは何か？ ②目標に合った紹介文とは何か？ ③紹介文に参考になる情報はどこにあるか？ ④紹介文の効果的な内容とはどのようなものか？ ⑤仲間のフィードバックを紹介文の向上にどう役立てるか？など，これらの項目について生徒が深く考えることで，これらの思考によって伝える内容をより工夫し，結果的に紹介文の質を向上させることになったであろう。また，文の修正という行為を素材にした仲間との交流は，他者の視点を知り，他者の視点から学ぶことができ，『自分自身を俯瞰する』力を養うことに繋がるよい機会であり手段であったと考える。

最後になるが，英語を学び始めてまだ日も浅い生徒達に「深く考える」ことをさせるのは決して容易なことではないが，生徒自身が，どんな思考の過程をたどったのかを見つめ直し，知識を活用させ，実際に伝えてみることでそれが伝えられたと実感できるよう，活動の目標や到達度との関係で現在の自分の状況や目指すべき方向を考えさせる場面，つまり，『自分自身を俯瞰する』場面を意図的かつ計画的に仕組み，英語で自分の考えを少しでも広げさせたり，深めさせたいと思っている。それが，『伝える力』を育むことになるであろうと考えるからである。

## 9 参考文献

- ・山梨大学教育人間科学部附属中学校平成23年度『研究紀要』
- ・山梨大学教育人間科学部附属中学校平成24年度『研究紀要』
- ・山梨大学教育人間科学部附属中学校平成25年度『研究紀要』
- ・文部科学省 『中学校学習指導要領解説 外国語編』 平成20年9月